

公葬のメディア表象の形成と共同体における その受容と継承

——伊藤博文の国葬における新聞・雑誌・絵葉書・写真帖を中心に——

とぎ や のり お
研 谷 紀 夫

1. はじめに

葬儀は、本人を追悼する場というだけでなく、残された家族や近親者が被葬者との関係に一つの区切りをつける儀礼でもある。とりわけ、社会的に大きな影響力を持った人物の死は、直接関係のあった人々だけではなく、社会全体が、故人の事績を追懐しながらも、その永遠の不在を受容する機会でもあろう。

とりわけ葬儀の中でも「公葬」と呼ばれる葬儀は、共同体全体で被葬者を追悼し、その死を受容する機会でもある。特に国が主催する国葬においては、多くの場合、葬儀は首都の中心で行われ、国家において高い地位にある人物や社会的に重要な人物が参列し、儀式は被葬者の社会的な貢献や偉業を称える目的で構成される。また、儀式において、市民が集まる道筋を葬列が行進する場面などは、被葬者と市民が別れを告げる場という意味で、葬儀の最も象徴的な行事の一つとなる。このような公葬がおこなわれた場合、メディアはそれらをどのように伝え、どのような機能を果たすのであろうか。本論考では、1909（明治42）年に暗殺された伊藤博文の国葬を対象として、各種のメディアが伊藤の国葬を伝える上で、どのような機能を担ったかについて考察する。

本論の先行研究としては、国家イベントの形成などの側面から、中世フランスの儀礼における王の象徴性を論じた Ernst Hartwig Kantorowicz の *The King's Two Bodies*¹（Kantorowicz [1957]）をあげることができる。また近代社会における国家イベントに関しては、Hobsbawm, Eric & Terence Ranger らの *The Invention of Tradition*² における David Cannadine らの研究がある（Cannadine [1983]³）。Cannadine は、19世紀から20世紀初頭における、大英帝国の王室における儀式が創生されていく過程を分析し、その中にビクトリア女王などの国葬なども考察の対象としている。また、日本の皇室のイベントとメディアなどの関わりについては、天皇の巡幸や葬儀、結婚式などのスペクタクルの形成

と、そこから見える近代天皇の特殊な位相を論じたフジタニ¹の研究などがある（フジタニ [1994]）。また、その他国葬などの公葬などに関する先行研究は、拙論も含めて複数の成果を見ることができる⁵。しかし、これらの研究においては、儀礼そのものの構成と、成立する経緯などについては論じられているが、儀式を伝えるメディアについては、詳しい考察が成されていない。一方で、その他のパブリックイベントとメディアとの関係については、津金沢らによる一連のメディアイベントに関する研究がなされており、その中では、戦後の皇太子のご成婚とメディアとの関係を論じた吉見らの研究成果がある（吉見 [2002]）⁶。しかし、同論考でも、国葬のような戦前の公の葬儀とメディアとの関係については研究の対象としていない。そのため、本論考では、先行研究に基づきながら日本における公葬に着目し、メディア表象とその機能についての考察を行うことを目的とする。

2. 伊藤博文の国葬

伊藤博文（1841-1909）は長州藩士として倒幕運動に関わり、維新後は初代の内閣総理大臣、宮内大臣、枢密院議長などを歴任し、1909（明治42）年に中国のハルビンで凶弾に倒れ、69歳の生涯を閉じた。伊藤博文暗殺の報は直後に日本に伝わり、当時の日本社会全体にも大きな衝撃を与えた。政府は直ちに伊藤博文の国葬の準備を行い、表1で示すような迅速な手続きで、国葬を実施した。伊藤の国葬がこれまでと異なる点は、それ以前の国葬においては、被葬者が旧藩主や皇族・公家などに限られていたが、伊藤の場合は被葬の対象者が初めて農民から身を起した元藩士となった点である。また、葬儀の会場はこれまでのような青山練兵場や豊島が丘墓地ではなく、日比谷公園が用いられた。これは、前日の3日が天長節で、青山練兵場が、天皇の親兵式で使用されており、葬儀の準備を行えないためであった⁷。日比谷公園は1903（明治36）年に日本で初めての西洋式公園として開園し、市民などが散策などに利用する他、各種の行事などが行われている。国葬が執り行われた1909（明治42）年には憲法発布二十周年の記念行事が行われ、伊藤も列席している⁸。この日本初の西洋式公園は日頃から市民に親しまれており、陪臣出身の伊藤の国葬を執り行う場としては、図らずも相応しい場となった。

また、伊藤は外国で死去したため、その遺体が大陸から軍艦で運ばれ横須賀に入港し、鉄道で新橋まで運ばれ、新橋駅から霊南坂の官邸まで砲車に乗せられて運ばれた。そのため、新橋駅から官邸まで遺骸が帰還する行列が構成されるなど、市民が公共空間で接することのできる、イベント性を持っていた。このような伊藤の国葬は、社会の大衆化の中で、大きく飛躍しようとしていた各種のメディアに大きく取り上げられた。

伊藤の国葬が行われた1909（明治42）年頃は、新聞・雑誌などのメディアは、大衆社会の到来とともに、その影響力を一段と増加させている時代だった。全てのメディアに共通

する背景としては、1904（明治37）年からの日露戦争によって、取材体制や販売体制が拡大し、人員、資金力、取材対象の規模が大きくなっていった点をあげる事ができる⁹。このような状況の中でも、特にその力を伸張させていたのが新聞であり、より大衆的、総合的な紙面を構成する新聞がその勢力を増進させる状況にあった。伊藤の国葬の様子は、新聞、雑誌、絵葉書、写真帖など、当時広まっていた多くのメディアに取り上げられることとなった。本論考においては、それらのメディアが、葬儀をどのように表象したかを考察して行く。

表-1：伊藤博文の暗殺から国葬までの行程

明治42年10月26日	・伊藤博文がハルビン駅で殺害される。
明治42年10月27日	・子 伊藤博邦より薨去届が提出される。
明治42年10月28日	・伊藤博文の国葬を執り行うために日比谷公園の使用願が東京市長に届けられる。（日比谷公園はドイツ式庭園として明治36年に開園。国葬が行われるのは初めてであった。）
明治42年10月29日	<ul style="list-style-type: none"> ・伊藤博文の遺骸の出迎えにあたって、新橋駅の楼上を借りる届け出が出される。（国立公文書館蔵「故枢密院議長公爵伊藤博文国葬書類（番号2A-038-05）」より。以下同文書は「国葬書類」と略記する。） ・伊藤博文の国葬を執り行うために、日比谷公園の使用許可が東京市長（尾崎行雄）より出される。（国立公文書館蔵「国葬書類」） ・伊藤家の葬儀掛の伊藤巳代治より、墓地が選定されたことが葬儀掛に伝えられる。（国立公文書館蔵「国葬書類」） ・国葬を日比谷公園で行うなどの実施概要が内閣総理大臣（桂太郎）より関係官僚に伝えられる。（国立公文書館蔵「国葬書類」） ・遺骸を出迎え、ならびに車中の警備を行う儀上兵の準備や対応に関する命令が陸軍で発せられる。（国立公文書館蔵「国葬書類」）
明治42年10月30日	<ul style="list-style-type: none"> ・警備の警察官の差し出しについての通達が出る。 ・葬儀諸祭式 並 日割臺数などの形式がまとまる。（国立公文書館蔵「国葬書類」） ・伊藤博文の遺骸を迎える人の列車が11月1日に東京（新橋）から横須賀に向けて午前6時50分に出発することが通達される。（国立公文書館蔵「国葬書類」） ・伊藤博文の遺骸の出迎えにあたって新橋駅の楼上を借りる件が鉄道院より許可される。（国立公文書館蔵「国葬書類」） ・葬儀の施設内容などが決定する。（国立公文書館蔵「国葬書類」） ・勲章の配列について通達がある。（国立公文書館蔵「国葬書類」） ・伊藤博文遺骸の駅から霊南坂の官邸、官邸から葬儀場、葬儀場から墓地までの道筋の打ち合わせをする。（国立公文書館蔵「国葬書類」）

	<ul style="list-style-type: none"> ・新橋駅から官邸までの行列の概要が決まる。(国立公文書館蔵「国葬書類」) ・棺をのせる軍用車両の調達願が葬儀掛から陸軍省へ出される。(国立公文書館蔵「国葬書類」) ・横須賀と軍艦秋津洲の出迎えの儀制についての通達。(国立公文書館蔵「国葬書類」)
明治42年10月31日	<ul style="list-style-type: none"> ・遺骸の行進について、駅から霊南坂の官邸、官邸から葬儀場、葬儀場から墓地までの道筋と、その道筋取り締まりについての通達が出される。(国立公文書館蔵「国葬書類」) ・沿道の学校の生徒の整列についての予定が出される。(国立公文書館蔵「国葬書類」) ・葬列の参加者とその概要が決まる。(国立公文書館蔵「国葬書類」) ・会葬者の服装が決まり通達が出される。(国立公文書館蔵「国葬書類」) ・伊藤家写真掛の小川一眞の葬場への入場許可が出される。(国立公文書館蔵「国葬書類」) ・河浦謙一へ葬列の途中の行粧の撮影の許可が出される。(国立公文書館蔵「国葬書類」) ・東京朝日新聞へ葬場での撮影不許可を伝える。(国立公文書館蔵「国葬書類」)
明治42年11月1日	<ul style="list-style-type: none"> ・伊藤博文の遺骸を迎える人の列車が東京(新橋)から横須賀に向けて午前6時50分に出発する。(国立公文書館蔵「国葬書類」) ・葬列の護衛についての通達が出される。(国立公文書館蔵「国葬書類」) ・式次第が号外の官報で告示される。 ・花環三十個を新橋駅に林軍兵士30人を準備させるように通達・伝報が出される。(国立公文書館蔵「国葬書類」)
明治42年11月4日	<ul style="list-style-type: none"> ・出棺並びに葬場祭が執り行われる。
明治42年11月下旬	<ul style="list-style-type: none"> ・葬儀の調度品の内容が作成される。(国立公文書館蔵「国葬書類」)

3. 国葬の概況を伝えるメディア

3-1 新聞・雑誌

新聞は伊藤の暗殺以来、一貫して伊藤の死とその後の国葬の様子を速報という形で伝えている。特に葬儀に関しては、伊藤の遺体の到着や国葬の順路などに関する情報を「彙報」という形で伝え、市民が身近に感じる対象ではない国葬を、参加可能なイベントとして認識できる情報を伝えている。本稿では伊藤の葬儀について、より詳細に扱った「都新聞」¹⁰を一例として考察してみる。

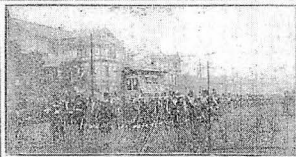
都新聞では、国葬の概要を予告する情報を、前述の「彙報」という形で、死去の5日後

の10月31日より掲載している。31日の記事では、国葬の日の午前、天皇が政務を行わないことや、葬列の道順、霊柩の入京の手順、弔砲の様子、国葬時の諸学校の対応などの情報を伝えている。また写真では国葬の会場となる日比谷公園での会場設営の様子を紹介している。伊藤の遺骸は11月1日に横須賀経由で入京したが、11月2日の朝刊でその様子が報じられている。同日の紙面では、横須賀港への入港と上陸、霊柩の入京、沿道の様子などが写真と記事の両方として紹介されており、砲車に乗せられた柩が、兵士に囲まれて枢密院議長公邸まで運ばれる様子を写した写真が掲載されている。また、同紙面は、国葬における入棺式の予定を伝えている。そして、翌3日には、皇太子が枢密院議長公邸に弔問に訪れたこと、韓国皇太子の反応、国葬の際に使用される柩車、勲章捧持者、国葬時の軍隊と学生の配置などが伝えられている。また、記事には柩車と、大井町で工事が続く伊藤の墓所の様子を写した写真が掲載されている。そして、国葬当日の4日の新聞においては、彙報として、会葬者の心得や、市中の表巾の様子、日比谷の斎場の様子、沿道の配置、大井町の墓地の様子などが報じられている。そして日比谷公園にある完成した葬場と控所の様子を写真で伝えており、同日の11月4日に国葬が挙行された。

国葬の翌日となる1909（明治42）年11月5日の朝刊（第三版）では、二面以降に前日の伊藤の国葬についての記事が掲載されている（図1）。右上に「悲哀に満つ帝都」という見出しをつけ、前日の国葬の様子を詳細に報じている。写真は主に、三枚使用され、一枚目は日比谷の国会議事堂（当時）の前を通る柩の写真、二枚目は柩が日比谷の斎場に到着した様子、三枚目は柩を馬車にのせて、大井町に移動する様子を写した写真が掲載されている。新聞記事においては、記事全体の5割を、柩が安置された霊南坂の枢密院議長公邸から日比谷公園までと、日比谷公園から大井町の墓所までの葬列の様子に割いている。特に沿道の混雑の様子や、警察の警備などについて詳しく報じており、全体としては、葬儀場での儀式よりも、公道における葬列の様子や、国葬に対する人々の反応に重点を置いている。そのため、葬儀場などでの儀式を詳細に伝えるという観点よりも、市民の視点からみた国葬見聞記といった視点からの報道である。このような記事の傾向から判断すると、新聞では主に「(1) 葬儀概要を伝える報道・速報的側面」「(2) 葬儀の特徴・希少性を伝える側面」に主眼を置いて伝えている。一方、新聞が速報的な側面の役割を担ったのに対して、当時、新聞と共に、大衆メディアとして成長していた雑誌は国葬をどのように伝えたのであろうか。

悲哀し満る帝都

▲日比谷の式場
▲雑沓の多い式場
▲川村大将一喝
▲日比谷大井町
▲増上寺の御
▲一山に花束
▲最後の日別
▲松田正久の車
▲大島新着

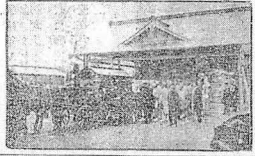


▲川村大将一喝
▲日比谷大井町
▲増上寺の御
▲一山に花束
▲最後の日別

▲雑沓の多い式場
▲日比谷の式場
▲松田正久の車
▲大島新着

▲松田正久の車
▲大島新着

▲最後の日別
▲松田正久の車
▲大島新着



▲松田正久の車
▲大島新着

▲最後の日別
▲松田正久の車
▲大島新着

▲松田正久の車
▲大島新着

▲松田正久の車
▲大島新着

▲松田正久の車
▲大島新着

▲松田正久の車
▲大島新着

▲松田正久の車
▲大島新着

図1：都新聞における伊藤の国葬についての報道（著者蔵）

雑誌メディアは、速報性では新聞に劣るものの、様々な話題の特集を組み、多様な情報を掲載できるその特性から、各誌とも複数の角度からその概要を伝えている。国葬の概要は、当時を代表的する雑誌である、『風俗画報』や『太陽』などにおいても取り上げられていたが、特に伊藤の国葬を特集した雑誌として週報社から出版された雑誌『サンデー』をあげることができる。『サンデー』は、明治41年に同社より出版された日本で初めての週刊誌である。『サンデー』の「伊藤公国葬号」は国葬から3日後の11月7日に発行され、一冊全てを伊藤の死と国葬の特集で構成している。同誌は「(1) 伊藤の生前の写真と家族

の写真」「(2) 誅恩・勅書」「(3) 憶伊藤公爵」「(4) 伊藤公論」「(5) 帝国の元勳」「(6) 名士の追懐談」「(7) 皇恩優渥」「(8) 噫帝国の柱石逝く」「(9) 国葬の光景(写真版)」「(10) 風流御前春畝公」「(11) 光栄ある国葬」「(12) 藤公傳」「(13) 世界の哀悼と論評」「(14) 伊藤博文論」「(15) 伊公の反面」といった、多様な記事やコーナーから構成されている。この中で、「(1) 伊藤の生前の写真と家族の写真」は、伊藤家における集合写真や統監時代の写真などによって構成された頁である(図2)。また、「(2) 誅恩・勅書」では、頁の周囲を伊藤と関わり深い人物の肖像写真が囲み、その中に、天皇より送られた「誅恩」や「勅書」などを掲載している。また、伊藤が暗殺されて日本に帰還する様子は、「(14) 靈柩故国に還る」において、記事とイラストと写真を用いて詳細を報じている。そして国葬については、図3にあるように、「(10) 国葬の光景(写真版)」において2頁見開きを用いて、枢密院議長公邸から日比谷公園までの葬列の行進、日比谷公園での儀式、日比谷公園から墓地までの葬列の行進、大井町の墓地での埋葬までを14枚の写真を使用して網羅している。これらの写真の中には、後述する写真師小川一眞(1860-1929)が経営する小川写真館が撮影したと考えられる写真も複数掲載されている。また、葬儀の様子を伝える写真の間に、齋主、葬儀委員長、儀仗指揮官、国葬委員の肖像写真を掲載している。

そして図4の「(11) 光栄ある国葬」においては、国葬の一部始終と、その舞台裏を、イラストなどを用いて報じている。また、「(3) 憶伊藤公爵」「(4) 伊藤公論」「(5) 帝国の元勳」「(6) 名士の追懐談」「(7) 皇恩優渥」「(8) 噫帝国の柱石逝く」「(10) 風流御前春畝公」「(12) 藤公傳」「(13) 世界の哀悼と論評」「(14) 伊藤博文論」「(15) 伊公の反面」などは、明治から昭和初期にかけて様々な政治運動に関わった活動家の杉山茂丸(1864-1935)や評論家の山路愛三(1865-1917)などによって執筆された伊藤博文を追悼した文章、追想録、伊藤の評伝である。このように、雑誌では「国葬号」と銘打って、国葬の直後に発行され、国葬の様子を伝えるとともに、伊藤の暗殺のいきさつや、日本までの帰還、さらに伊藤の評伝や追想録など、故人を追悼し、後世に残る伊藤の事績をまとめた豊富な内容となっている。この『サンデー』は奥付に記載された日付が正しければ葬儀から三日後には、また当時の印刷や流通の状況を考えれば遅くとも一週間以内には発行されていたと推定される。そのため、本誌のような雑誌が担った役割としては、「(1) 葬儀概要を伝える報道・速報的側面」「(2) 葬儀の特徴・希少性を伝える側面」「(3) 葬儀を歴史的イベントとして記念し、被葬者を顕彰する側面」の三点が含まれていると考えられよう。



図2：雑誌『サンデー』における伊藤の家族と生前の写真（著者蔵）

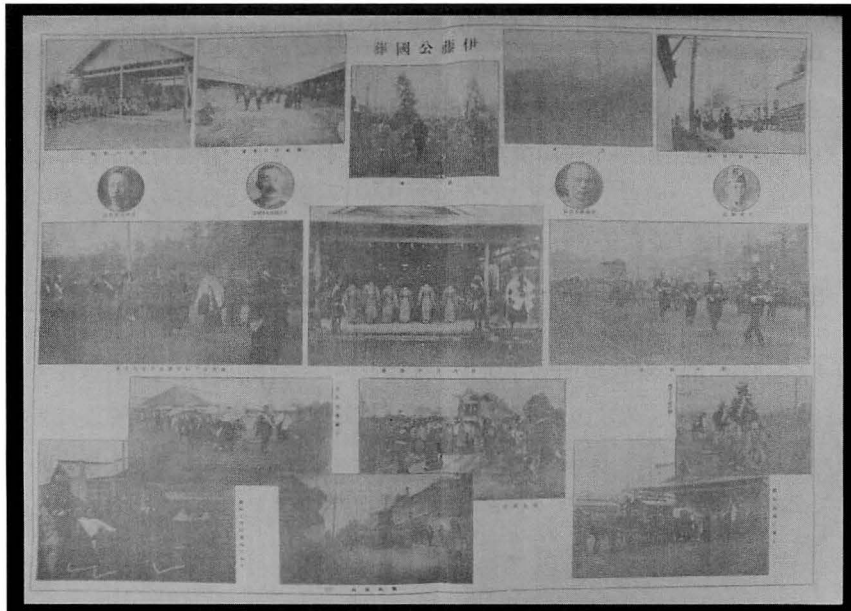


図3：雑誌『サンデー』における「国葬の光景（写真版）」（著者蔵）



図4：雑誌『サンデー』における「光榮ある国葬」の記事（著者蔵）

3-2 絵葉書

前述した新聞と雑誌に加えて、伊藤の国葬が行われた当時においては、絵葉書が、戦争や様々な出来事をビジュアルを用いて報道する一つのメディアに成長していた。元来、絵葉書は、1900（明治33）年に私製はがきの発行と絵や写真の入った葉書の発行の認可がされたことにより発行が始まった¹¹。その後、日露戦争中には、多くの絵葉書が発行され、1907（明治40）年には、絵葉書の表面下部三分の一、1918（大正7）年には二分の一に通信文を記述することが許可された¹²。

明治40年代には、複数の絵葉書発行者が、高い質の絵葉書を短時間で制作できる体制を整えており、伊藤の国葬時には、複数の制作会社より数十種類の絵葉書が刊行されている。絵葉書は、国葬の葬列が進む順路の中の一点にカメラを固定して、葬送のハイライトを撮影し、それを絵葉書に仕立てている。そのため、後述する写真帖と異なり、ある1つの地点で葬列の各部を捉えているところに特徴がある。恐らく各社とも、順路の様々な所にカメラを手配するほど余裕はなかったと考えられが、後述する写真帖には掲載されていない小さい路地などの様子を見ることができる。

また写真帖の撮影スポットは官庁が並ぶ整然とした町並みが多く、沿道も計画的に配置された児童が並ぶ場所などが中心であるのに対して、絵葉書は、写真帖などで選択されな

かった裏道や、高い社会階層に属さない人々が沿道に並ぶ様子を写した写真などが含まれている。例えば、図7には、狭い洋裁店の中や屋根の上にひしめきながら葬列の様子を見物する人間や、沿道に所狭しと並ぶ庶民の姿が写し出されている。また震災前の東京には江戸の情緒を残す狭い路地が残っており、そのような道を通る葬列は、図6のように、沿道の人々から手が届きそうなところを行進している。このような絵葉書の多くは葬儀が行われた日より3日から1週間以内に発行されたと考えられる¹³。

絵葉書は写真帖のように国葬の開始から終了までを網羅的に扱ったものではないので、気に入った絵葉書のセットを組み合わせて選択することで、自分なりの観点から葬儀の様子を捉えて、残すことが可能であった。さらに、速報メディアという特性に加えて、これらの絵葉書を、葬儀に参加できなかった人々に送り、その様子を伝えることが可能であった。そして、絵葉書にメッセージを記入して送ることで「見る」ことを共有する役割もあったと考えられる。

また絵葉書は、速報として、国葬の様子を伝えるだけではなく、国葬を歴史的イベントとして記念することや、被葬者を記念し顕彰するメディアとしても制作されたと考えられる。図8や図9などは、他と比較しても装飾性が高く、図9は一種のレリーフとも言える装飾が施されている。日露戦争においても質の高い装飾を施した絵葉書が、実用目的ではなく、戦勝の記念及び記録目的で制作されており、伊藤の国葬においても、単にメッセージを伝える媒体としてではなく、永年にわたって保存することを目的として制作された絵葉書も多く存在している。実際に伊藤博文の次男で貴族院議員などを歴任した伊藤文吉（1885-1951）の子孫宅には、国葬を記念する品として、伊藤の国葬の様子を伝えた絵葉書が保存・継承されている。また、伊藤博文を顕彰するために山口県光市に建設された伊藤公資料館においても、国葬の概要を伝える資料として、絵葉書が保存・展示されている。

これらから、国葬の概要を伝える絵葉書が担った役割としては、「(1) 国葬の概要を伝える報道・速報的側面」「(2) 国葬の特徴・希少性を伝える側面」に加えて、「(3) 国葬を歴史的イベントとして記念し、被葬者を顕彰する側面」が含まれていたと考えられよう。そしてそれらを、発信者と受信者の間で「共有」できるメディアでもあった。



図5：三宅坂付近の沿道の様子を掲載した絵葉書1（著者蔵）



図6：三宅坂付近の沿道の様子を掲載した絵葉書2（著者蔵）



図7：現在の赤坂付近の沿道の様子を写した絵葉書（著者蔵）



図8：飾り枠が周囲に印刷された絵葉書（著者蔵）



図9：エンボス調の絵柄の中に国葬における沿道と葬儀場の様子を撮影した写真を掲載した絵葉書（著者蔵）

3-3 写真帖

最後に写真帖における国葬儀式の表象化について概観する。写真印刷技術が明治の中期以降に発達すると、複数の写真帖が発行される状況が続いていた¹⁴。それらの写真帖を、多く刊行していた代表的な発行元として、写真師小川一眞が経営する小川写真館をあげることができる。小川は「伊藤公爵家写真掛」として、遺体の帰還、出棺、葬列、葬儀、埋葬に至る一連の経緯を写真で網羅し、一冊の写真帖にまとめた。小川は葬儀場の撮影を許可された数少ない写真師の一つであり、他の雑誌などにも利用された葬儀の写真の多くが小川の写真館の手によるものであると考えられる。新聞に掲載された写真帖の広告文によれば、当初この写真集は伊藤家の記録として撮影されたものであるが、彼の置かれた公の立場から考え、広く公開することにその意義があるとして、遺族の許可を受けて特別に公刊されることとなったとされている。伊藤の写真集は新聞紙上などで広告が打たれ、一冊一円五十銭の価格で予約販売の形式で頒布された。このように、当時伸長してきた大衆向けビジュアルメディアによって伊藤の葬儀のスペクタクルがイメージ化され、一般に広く頒布された。小川の写真帖は伊藤の遺骸の帰還から埋葬までを一貫して取り上げており、他のメディアと比較しても、高い網羅性を持っている。

小川は伊藤の遺体が横須賀に到着する時の、港での上陸の様子や、新橋到着後から官邸到着までの間、さらに葬儀当日には葬儀場内の立ち入りも許可され、埋葬に至るまで全て

の行程を写真に撮影することが可能であった。葬儀場への立ち入りは東京朝日新聞社などが申請を出したにも関わらず却下されており¹⁵、単に報道目的ではなく、より質の高い写真を撮影する写真制作のための撮影が優先されたことがわかる。また、事前に決められていた兵士や学童などの沿道の配置を鑑み、効果的に背景の沿道の様子と、葬列の様子をコントラストをつけながら撮影している¹⁶。そして、写真帖の被写体としては、棺・勲章・遺族など「本人」と関連する被写体、重臣・政治家などの「政府」を表す被写体、儀仗兵・兵士など「軍」を象徴する被写体、群集・学童などの「市民」を象徴する被写体、大使・特使など「海外の政府」を表す被写体、榊・花輪など「天皇、皇族、韓国皇太子」などの王皇族を表す被写体など、伊藤の国葬に参加した主要な要素を余すところなく取り込み表現している。これらによって、国葬が一部の政府や皇族など限られた関係者だけではなく、「天皇・皇族」「政府」「市民・国民」「海外政府」「軍」が被葬者である伊藤を囲んでいるイメージを形成している。

このような構成から考えると、国葬の概要を伝える写真帖には、「(1) 葬儀概要を伝える報道・速報的側面」の他、「(2) 葬儀の特徴・希少性を伝える側面」や、さらに「(3) 国葬を歴史的イベントとして記念し、被葬者を顕彰する側面」の三点の役割を担っていたと考えられる。

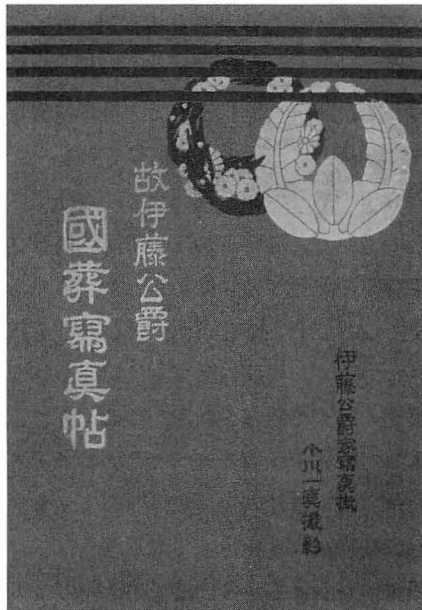
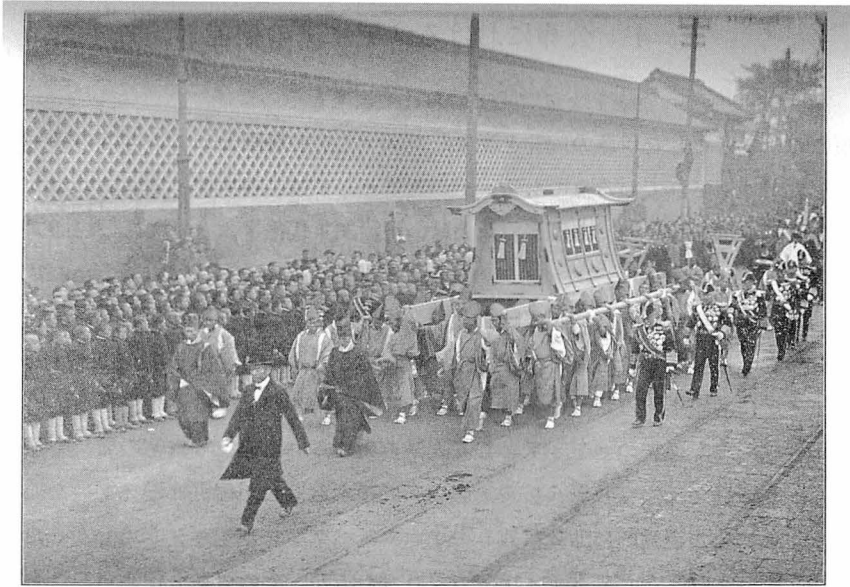
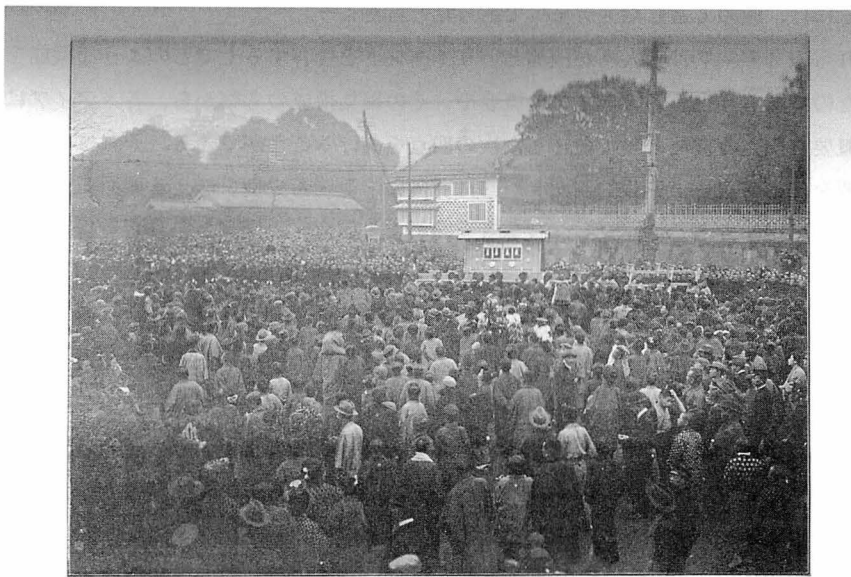


図10：小川一真によって制作された『伊藤公爵国葬写真帖』の表紙（著者蔵）



(轎) 部一ノ往行儀葬ノ過通近附圖ヶ霞
左男古文上高、一ノ一、臨白輪石ノ置、一ノ一、將大平海木出、次其、段大平海木出、次其、將大平海木出、前光御石、將大平海木出、次其、段大平海木出、一ノ一、立、頭先側地方左、向、轎

図11：『伊藤公爵国葬写真帖』に収録された霞ヶ関付近の写真（著者蔵）



景光ノ踏雜者觀葬近附圖ヶ霞

図12：『伊藤公爵国葬写真帖』に収録された外務省付近の写真（著者蔵）

4. 公葬におけるメディアの機能

4-1 メディアにおける表象とその機能

前項において考察した伊藤の国葬を表象したメディアの特徴として言えるのは、極めて多くの写真が使用されている点である。その背景としては、各メディアにおける写真印刷技術の発達をあげることができよう。新聞は、明治30年代後半より紙面に網目印刷写真を掲載することが可能となり、メディアのビジュアル化が進展していた¹⁷。また、雑誌においても同年代より総合誌・大衆紙が伸長し、発行部数を伸ばしていたが、網目印刷などの写真イメージを掲載することが可能となり、銅版画などよりさらにリアルなイメージが、一般メディアにも浸透する状況にあった。さらに、大衆メディアはその裾野を広げ、日露戦争以来、絵葉書が庶民のメディアとして人気を集めていた他、写真帖の発行や無声映画の公開など、庶民が様々なビジュアルメディアに接する機会が確実に増えていた。また葬儀という対象自体が視覚的に印象に残りやすい、スペクタクルイベントでもあった。そのため、活字よりも写真などのメディアで表象された方が、その概要も伝えることも容易であり、対象の特徴を活かした情報を伝えることができる。よって各メディアでは、極めて多くのビジュアル手段を用いて、葬儀を伝えている。その点においては、より高精細な写真を掲載することのできる、写真帖や絵葉書などのビジュアルメディアが、葬儀の様子を伝えるには、極めて適したメディアであったと言えよう。

これらのメディアは、人々が国葬というイベントを受容する上でどのような機能を持っていたのであろうか。各メディアの概要や、その編集構成の考察から、各メディアには葬送の概要を伝える機能として前述した次の四点をあげることができる。それは、「(一) 葬儀概要を伝える報道・速報的側面」「(二) 葬儀の特徴・希少性を伝える側面」「(三) 葬儀を歴史的イベントとして記念し、被葬者を顕彰する側面」の三点とそれらを総合した効果としての「(四) 被葬者の死を社会に認知させる側面」である。

一点目の「(一) 葬儀概要を伝える報道・速報的側面」は、新聞、雑誌、絵葉書、写真帖の四点の考察で見たように、国家的な行事である伊藤の国葬を伝える、報道的な意味合いである。特に伊藤の葬儀は、暗殺という歴史的な事件の後に行われたイベントである。そのため、伊藤の遺骸の帰還や、新橋駅から枢密院議長公邸までの柩の行進と国葬など、全ての点において、事件性やイベント性を持っており、これらを伝える報道と速報性を担っていたと言える。

次に「(二) 葬儀の特徴・希少性を伝える側面」の点については、葬儀は元来様々な習俗や国際的な協約に基づいて行われており、それらの組み合わせで施行された葬儀は、「博覧」的性質を持っているユニークな存在である。これらを表象する手段として、多様なビ

ジュアルメディアが活用されたとも言えよう。また、葬儀には元勳など社会的に高名な人物が一つの場所に集まる稀有な機会であり、この珍しいイベントを伝える側面も持っていた。

また、「(三) 国葬を歴史的イベントとして記念し、被葬者を顕彰する側面」については、国葬というイベント自身を記念することと、被葬者である人物の顕彰を行うことである。それは、伊藤の国葬を歴史的な出来事としてとられ、その様子を写したイメージは、一つの歴史的な記録として位置付け、未来に保存・継承される対象として捉えられることである。これらの例は、小川の写真帖の広告の文章にも見ることができる。前述した小川一眞の写真帖は新聞に広告が出されていたが、以下のような広告文が添えられていた。

蓋し伊藤家累代の紀年の為に撮影を命ぜられたるものなるも公の如きは、一家の私すべきに非ず国民の以て紀念とせざるべからざるもの強て請ふて江湖に領つく国民たるもの速に一本を具へて故偉人をしのばざるべけんや¹⁸

この宣伝文から理解できる通り、メディアにおいて表象された伊藤の国葬は、単に伊藤家の葬儀にとどまらず、また政府の一部の要人のための葬儀でもなく「江湖＝公」のイベントであり、民衆が国民として記念する行事とされている。そして、「紀念」として長く保存することが訴えられている。実際、この『伊藤公爵国葬写真帖』は帝国図書館に収蔵され、現在は国立国会図書館に2冊収蔵されている他、博文館の創業者である大橋佐平の蔵書を集めた大橋図書館など複数の図書館に収蔵されている¹⁹。また同写真帖は、伊藤家にも寄贈され、現在においても、同写真帖が保管されている²⁰。写真帖は単に、速報として国葬の様子を伝えるだけでなく、その概要を将来に渡って伝えていく記録メディアとしてとられている。これらの特徴は、写真帖だけではなく絵葉書と雑誌にも見ることができ、特に雑誌『サンデー』は、速報性ととも伊藤博文という人物を将来に伝えていくための「記録の継承メディア」としても機能するように構成されている。そして実際にこの雑誌は、伊藤の国葬の記録を将来に伝えるメディアとして、伊藤博文の子孫宅に写真帖と共に保存されていた²¹。

さらにこれら三点の機能を総合した結果として、各メディアは、「(四) 被葬者の死を社会に認知させる側面」を持っていたと言えよう。数日前までに、日本の政界の中心にいた伊藤が外国で暗殺されるという突然の事件によって帰らぬ人となり、社会全体が伊藤の永遠の不在を受け入れるには、共同体全体がそれを納得し受け入れるいくつかの契機が必要であった。それらの中心となる儀式が国葬となったが、日本の多くの国民がその儀式に参加できるわけではない。しかし、図6、7、11、12に示されるように、柩の姿に変わった

伊藤を多くの群集や、政治の中心にいる山縣有朋（1838-1922）や大山巖（1842-1916）といった元勳が取り囲む写真が、広く流布されることにより、伊藤の死が元勳や帝都の群集に見送られ「受容」されたイメージがメディアに掲載される。さらにそのイメージに触れた読者が、伊藤の死を改めて「受容」といった過程に用いられていったと言えよう。そして上記のような機能を担いながら、葬儀の概要をイメージで伝え、そのメディアを共有・継承することが、共同体における記憶のイメージを形成することにも連なっていた。

4-2 各個別メディアにおける公葬の表象化とその機能

伊藤の国葬を対象としたメディアには前述の四つの機能が含まれているが、それぞれの各機能を厳密には分けることは難しく、複数の要素の比重の違いは各メディアの種類や、制作主体によって異なる。例えば、図5、6、7のような絵葉書は、特に装飾性は無く、(一)の国葬の様子を実況的、速報的に表現している側面が強い。その一方で、図9のような絵葉書は、装飾性が強く絵葉書があたかもレリーフのようにデザインされており、(一)の側面とともに「(三) 葬儀を記念し被葬者を顕彰する側面」の側面が強い。絵葉書は、それらを発行した主体や制作方針によって、四つの機能は大きく異なっていると言える。

一方で小川の写真帖は、新聞などと比較して、その速報性は劣るものの、葬儀から1週間弱で、葬儀の概要を写真帖の形として伝えており、ある程度(一)の速報メディアとしての役割を果たしている。また、「(二) 葬儀の特徴・希少性を伝える側面」の点についても、英照皇太后（1835-1897）の国葬を対象とした鹿島清兵衛（1866-1924）などの写真帖²²と同様に、国葬の習俗的な側面を伝え、伊藤の遺骸が横須賀港に到着する様子など、これまで、メディア表象がされなかった珍しい点などが表象化されている。また、「(四) 被葬者の死を社会に認知させる側面」においても、前述した図11、12のように、群衆や元勳が囲んでいる様子を伝えている。そして、「(三) 葬儀を記念し被葬者を顕彰する側面」の側面においては、前述したように、広告において、本写真帖を記念として残していく対象であることが述べられている。そのため四点の全てが包摂されている。

同様に、雑誌『サンデー』においても、これらの四点が、バランスよく構成されており、「(一) 葬儀概要を伝える報道・速報的側面」については、発行日は葬儀から3日後であり、新聞と比較すると速報性は劣るものの、葬儀の概要を3日程度で読者に伝える役目を果たしている。また、「(二) 葬儀の特徴・希少性を伝える側面」の面においても、葬儀の舞台裏などを伝え、国葬の非日常性を伝えている。さらに、「(四) 被葬者の死を社会に認知させる側面」についても、葬儀の概要とともに、伊藤の死に対する各人の反応を掲載するなど、葬儀の概要とともに社会における伊藤の死の受容の様子を伝えている。さらに、「(三) 葬儀を記念し被葬者を顕彰する側面」についても、伊藤の葬儀の概要を構成に伝える「保存

版」という位置づけで編集がされている。

そして、特に四つの要素の中で、「(三) 葬儀を記念し被葬者を顕彰する側面」と、「(四) 被葬者の死を社会に認知させる側面」が要請される葬儀は極めて盛大な葬儀となり、メディアで取り上げられる量も大きくなる。逆に、(三)と(四)の要素が求められない人物の葬儀に関しては、メディアによって、特集される必要性も希薄であり、メディアが扱う量も小さい。

例えば、伊藤の国葬の時点よりもメディア環境が発達した1916（大正5）年の大山巖の国葬や、1922（大正11）年の山縣有朋の国葬においては、伊藤の国葬時ほど、様々なメディアによって取り上げられることや、特集が組まれることはなかった²³。その大きな理由としては、大山や山縣が伊藤のような大衆性を獲得していなかった点をあげられる。また、伊藤が詳細な情報を得ることが難しい「外国」において「暗殺」されるといった劇的なクライマックスで生涯を閉じたことと対照的に、大山や山縣は相応の年齢において、既に病氣療養中であることが報道された後に病没しているため、社会がその死を無理なく受容することができた点もあげられよう。よって、(三)の側面で指摘したように、葬儀を契機に被葬者を顕彰し、故人の記録を後世に伝えることや、(四)の側面で指摘したように、その死を公葬という公の場で改めて認知する必要性が起こらなかったことが原因である。メディアにおいて公人の葬儀を扱う意味の中心は(三)と(四)にあり、その側面が強く必要となったとき、必然的に(一)や(二)の役割も大きくなったと言えよう。

5. まとめ

本稿においては、伊藤博文の国葬を対象としながら、国葬のような公の葬儀が多様なメディアにおいてどのように表象化されるかについて考察した。そして、社会的な影響力を持つ公人の葬儀を表象したメディアがどのような役割を持つかについて論考を進めた。明治40年代は、写真印刷技術の発達が進み、各メディアは写真を、3日から1週間以内に印刷して、頒布する技術が整っていた時代であった。また、新聞や雑誌においても、バリエーションを持った段組みやレイアウトの仕方が可能となり、情報内容を編集・構成する、意識、技術、スキルがあがっていた。これらは、日露戦争で培われた様々な技術の発展によるものが大きく、明治のメディアは一定の成熟期を迎えていたと言えよう。そのような技術、スキルそしてメディア関係者における意識の高まりの中で、「公葬」という題材は、「(一) 葬儀概要を伝える報道・速報的側面」、「(二) 葬儀の特徴・希少性を伝える側面」、「(三) 葬儀を記念し被葬者を顕彰する側面」の三点と、それらを総合して結果的に「(四) 被葬者の死を社会に認知させる側面」の四点の目的を読者に情報を伝える役割を担うことになった。そして上記のような機能を担いながら、葬儀の概要をイメージで伝え、そのメ

ディアを共有・継承することが、共同体における記憶イメージ形成の一助になったと考えられる。

このような、「公葬」という題材は、写真印刷技術などが一定の領域に達した明治後期以降、メディアでとりあげられる重要な題材の一つとなった。1912（明治45／大正元）年の明治天皇の死去に際しては、伊藤の国葬において実践した葬儀に関する取材や、それらを集約化する手法などを、明治天皇の葬儀に応用した。新聞、雑誌、絵葉書、幻燈、映画、写真帖などは、伊藤の国葬の概要をはるかにしのぐ勢いで、天皇の国葬を集約しているが、このメディア表象においても、前述した四点の機能を持っていた。

しかし、前述したように全ての公葬において、そのメディアでの扱いや注目の度合いが同じであった訳ではない。特に、明治30年代以降から戦前にかけて、メディアが最も大きな関心を払った人物の葬儀は、伊藤博文、明治天皇、大正天皇などであった。伊藤に関しては、全体としては突然死去した事件性からして、主に(三)(四)が強調されていたと考えられよう。また、明治天皇も、天皇という特別な地位に加えて、明治という激動の時代とその身体が結びつく稀有な存在であるため、(四)の観点などからその大きな存在の喪失を受容することと、(三)の観点から明治天皇の葬儀を歴史的イベントとして捉えて継承し、天皇の事績も顕彰する意味合いから、極めて大きな扱いをうけている。

国葬のような公の葬儀がメディアにおける主要な題材として、本格的に取り上げられるようになったのは、伊藤の国葬が始まりと考えられるが、その手法は民間のメディア関係者によって実践が行われ、公葬という題材は、社会の耳目を引く重要なコンテンツ（情報の中味）の一つとなった。それはビジュアルメディアを編集し、その概要を速報で伝える報道的な素材であるとともに、メディアが公の意識や共同体の連帯感を構築し、共同体において受容・共有・継承される記憶イメージを残す重要な担い手であることを示す題材の一つでもあったのである。

-
- 1 Ernst H. Kantorowicz, "The King's Two Bodies : A Study in Mediaeval Political Theology", Princeton University Press, 1957
 - 2 Hobsbawm, Eric & Terence Ranger, "The Invention of Tradition", Cambridge University Press, 1983
 - 3 David Cannadine, 'The Context, Performance and Meaning of Ritual : The British Monarchy and the Invention of Tradition', "The Invention of Tradition", Cambridge University Press, 1983
 - 4 T. フジタニ、『天皇のページェント』、NHK 出版、1994
 - 5 代表的な研究として以下の論文をあげることができる
研谷紀夫「鍋島直正の葬儀と国葬の成立に関する基礎的研究」、『鍋島報効会助成 研究報告書第5号』、財団法人鍋島報効会、2011

- 宮間純一「大久保利通の葬儀に関する基礎的考察—国葬成立の前史として」、『風俗史学』、41号、2-21頁、2010
- 中村武司「ネルソンの国葬—セント・ポール大聖堂における軍人のコメモレイション」、『史林』、91巻1号、176-197頁、2008
- 荒船俊太郎「大隈重信陸爵・国葬問題をめぐる政治過程」『早稲田大学史記要』、38号、31-64頁、2007
- 6 吉見俊哉「メディア・イベントとしての『御成婚』」、津金澤聰廣編『戦後日本のメディア・イベント— [1945-1960年]』、世界思想社、2002
 - 7 報知新聞1909（明治42）年11月1日号、報知新聞社
 - 8 前島康彦、『日比谷公園 日本最初の洋風国民広場』、東京都公園協会、1980
 - 9 春原昭彦、『日本新聞通史：1861年-2000年』、新泉社、1987
 - 10 都新聞は1884年（明治17）年に小西義敬によって発刊された今日の東京新聞の起源となる新聞で、1888（明治21）年に「みやこ新聞」に改名する。
 - 11 郵政省郵務局郵便事業史編纂室『郵便創業120年の歴史』、ぎょうせい、1991
 - 12 同上
 - 13 発行所により国葬の模様を撮影して絵葉書の発行時期は異なっていたと考えられるが、著者の所蔵する「東京今川橋青雲堂」が発行した絵葉書では、国葬から4日後の11月8日の消印が押されて、実際に使用されている。そのため、当時の絵葉書の印刷に要する日数は3日から1週間以内であったと推定される。
 - 14 三木理史『世界を見せた明治の写真帖』、ナカニシヤ出版、2007
 - 15 内閣『故枢密院議長公爵伊藤博文国葬書類』、国立公文書館蔵、1909
 - 16 同上
 - 17 小林弘忠『新聞報道と顔写真—写真のウソとマコト』、中央公論、1998
 - 18 都新聞、1904年11月7日付広告
 - 19 国立国会図書館には小川写真館が発行した『伊藤公爵国葬写真帖』の初版と第3版の2冊が所蔵されている。
 - 20 研谷紀夫「小川一真と国葬写真帖 ～異なる版の相互比較より写真帖編集の経緯とその編集観点を探る試み～」、『日本写真芸術学会誌』、第17巻2号、31-48頁、2008
 - 21 豊田穰『初代総理 伊藤博文 下』、講談社、1987
 - 22 鹿島清三郎『英照皇太后陛下御大葬写真帖』、玄鹿館、1897
 - 23 大山巖の国葬は伊藤と同様に小川一真によって撮影されているが、それらの写真は市販されず、大山家やその近親者のみに配布されたものであると考えられる。同写真帖については、注20にある拙論と次の図録に詳しい。
- 行田市郷土博物館『百年前にみた日本：小川一真と幕末・明治の写真』、2000